様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２６日現在

研究種目：若手研究Ｂ
研究期間：２００６年度　～２００８年度
課題番号：18720087
研究課題名（和文）　アイヌ近代文学に関する基礎的研究

研究課題名（英文）　Study of Aynu Modern Literature

研究代表者
李　建志（ＬＥＥ　ＫＥＮＪＩ）
県立広島大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：70329978

研究成果の概要：
アイヌは主に北海道を拠点とする日本列島の先住民であった。しかし、近代化の過程で日本国に編入されたため、アイヌにとっての近代化は「日本化」とともに行われざるを得なかった。それでは、ユカラのような英雄叙事詩などを中心とするアイヌの文芸は、近代文学としてどのように発展を遂げたのか。主に、日本語で書かれることになるアイヌの近代文学は、アイヌのアイデンティティ問題と深く関わりつつ、戦後の権利運動にまで影響を与えているといえる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,100,000	0	1,100,000
２００７年度	1,000,000	0	1,000,000
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	390,000	3,790,000

研究分野：比較文学比較文化、マイノリティ研究、朝鮮文学朝鮮文化
科研費の分科・細目：各国文学・文学論
キーワード：アイヌ、近代文学、日本近代、マイノリティ、近代化、アイデンティティ、ナショナリズム、日本近代文学

１．研究開始当初の背景

（１）マイノリティ研究の立場から

在日朝鮮人など、マイノリティの立場から日本文学を考えるという研究をしていたところ、戦後におけるアイヌと在日朝鮮人の運動の差異性と類似性について関心を持つようになった。

（２）文学研究者として

筆者（李）は文学研究者であり、朝鮮近代文学研究などで論文執筆、学会発表、研究書の出版などといった研究活動をしてきたものだ。ゆえに、アイヌの問題をとらえる際に、文学という切り口から考察したいと考えるようになった。そこで、アイヌ文学といえば、ユカラ、ウポポなどといった、前近代から伝わる口承文芸を主に指すという状況にあることから考えて、アイヌにとって近代文学とはなんなのかという問題を提起しようと思ったのである。主な対象としては、明治以降のアイヌ系の人びとがいかなる文芸作品を書いてきたかを考えることとした。

２．研究の目的
（１）比較文学の手法を応用する
　もともと、比較文学の研究者である筆者（李）は、文学における近代化のプロセスという問題に関心があった。そこで、アイヌ文学も近代化の過程としてとらえることはできないかと考えるようになった。もちろん、アイヌにとって「日本語を通しての近代化」であり、圧倒的な権力のもとでの模索となるわけだが、そのなかでもアイヌにしかない近代化の軌跡をたどることができるのではないかと考えるようになった。

（２）朝鮮および沖縄との比較
　朝鮮も、近代化を日本経由で行った。これは植民地統治という日韓の歴史的問題が影を落としているのだが、それがちょうどアイヌ問題を考える際にも、よい比較対照となると考えた。さらに、沖縄は、アイヌとも、朝鮮とも状況が異なるものの、言語状況（母語たる特徴ある方言が失われたという状況）は、比較対照としては意味があると思われる。特に、沖縄出身の知識人である伊波普猷が、大正期にアイヌの知識人違星北斗の話を聞いた際、明治２０年代の沖縄と比較して論じているのだが、このように沖縄との比較も有効であると思われたのである。

（３）補足
　先にふれたように、伊波は、明治２０年代の沖縄と大正期のアイヌを比較しているのであり、そこには微妙な差別＝沖縄知識人によるアイヌ差別が横たわっている。これは、朝鮮人労働者の沖縄差別と同様に、微差のナルシシズム（フロイト）を感じることだ。マイノリティ同士の対立とは、近代社会に一般的に見られる傾向かもしれないが、敗戦後日本でマイノリティが連帯することを訴えあうのも、このような対立の歴史をふまえなければ理解しきれない問題だといえよう。

３．研究の方法
（１）文献収集
　主な研究方法として、コピーや古書、そして最新の文学・文化研究書、あるいは聞き書きや古いアイヌの生活を偲ばせる写真や映像などといったかたちで文献を集め、それを読解することで、アイヌにおける近代化の流れをつかむことが必要とされた。そのため、多くの文献を、公費でまかなう一方、足りない分に関しては私費も投じて収集してきた。その際、北海道での調査は、この収集に大いに役立つものであった。

（２）調査
　主に北海道で調査を行ってきた。筆者（李）が主に関心を持つ、鳩沢佐美夫関係の文献収集だけでなく、鳩沢を知る数名の方にお会いでき、お話を伺うチャンスを得られたのは、直接何度も北海道を訪れたからこそできたことであり、研究室にこもっていたのではできなかったことだと思われる。それゆえ、何度も調査に向かうが、２００８年にアイヌが「先住民」としてはじめて公認されるなど、先住民としてのアイヌの活動とアイヌの戦後文学とを重ねて考える契機となった。

（３）比較
　筆者（李）自身が在日朝鮮人であるため、そのアイデンティティや、書かれている作品の内容分析で、さまざまな切り口を育てることができた。沖縄との比較は、鳩沢とほぼ同世代の作家である金城哲夫に限定されたが、在日朝鮮人、および朝鮮近代文学とアイヌ近代文学の比較は、かなりの程度すすんだといっていい。
　筆者（李）の朝鮮近代文学研究の成果から、アイヌ近代文学の成り立ち、その方向などを、バチェラー八重子を筆頭に、明治期の知里幸恵、知里真志保（知里きょうだいは、厳密には作家ではないが、文学的な業績としてここではとらえる）から、違星北斗、森竹竹市、江口カナメ、戸塚美波子など、どちらかというと韻文が多く、散文（小説家）は、数えるほどしかいない。それでも、鳩沢や上西晴治など取り上げるべき作家がいて、これらをアイヌ近代文学史として編み上げるとき、朝鮮近代文学を「鏡」として考察することが計画されていることを、ここに明らかにしよう。

４．研究成果
（１）平成１８年度
　基本的な資料の収集、これまでの研究文献の収集と読解を中心とした。結果、いままであまり知られていなかった俳人や同人誌レベルで作品を書いていた人々の名前と作品に出会えたことが成果としてあげられる。
　さらに、自らをアイヌであると自称しつつ小説を書いた数少ない作家のひとりである鳩沢佐美夫について、彼とともに文学活動をやっていた札幌市在住の須貝光夫氏にお会いし、鳩沢文学についての議論をかわしたことが大きな成果としてあげられるだろう。須貝氏は鳩沢の評伝『この魂をウタリに-鳩沢佐美夫の世界』をものした方だ。
　やはりほとんどのアイヌ系の作家が自らをアイヌだと自称しない理由は差別によるもので、アイヌであることが明らかにされてしまったため筆を折り姿を消してしまった作家がかなりの数に上ることが、須貝氏との交流を通して理解された。
　また、小笠原にいる西欧系移民の子孫の方々と東京でお会いする機会を得たが、彼等

の話によると小笠原が返還された 1968 年当時から、小笠原西欧系移民の子孫(先住島民ともいう)の方々は自ら「アイヌのようになってはいけない」と称していたという。もちろん、これはアイヌが受けてきた過酷な立場を前提としたことばだろう。実際に、アイヌ系の作家が、自信の出自が知られてしまうと姿を消してしまうというのも、アイヌに対しての根強い「歴史的な記憶」がこのような行動をとらせているのは間違いない。小笠原先住島民の事例は、そのような立場に立つことを他のマイノリティも恐れていることを知らせてくれている。

前近代から近代へ移行する期間の日本によるアイヌ語政策の問題がわかってきた。江戸時代はアイヌに対して日本語を教えないという政策だったものが、明治期には日本語を教え、そのかわりアイヌの人々の生活圏を囲い込むような時代を経て、その後の日本同化へと進んでいったようだ。この時代的な流れのなかで、アイヌ近代文学成立に関して日本語(ヤマト=和人社会)との比較文学的考察が可能になるだろう。

当該年度は、それまでのアイヌに関する研究をまとめたものとして、以下に記した［雑誌論文］②と③の２編の論文と、［学会発表］の①と②の二つの成果が上がっている。

（２）平成１９年度

平成１９年度は、文献の収集が中心となり、さらにその読解のための論理的な展開が重視されるため、最新の文学研究所や文化論の研究所に目を通した。

もちろんアイヌ関係の文献とアイヌ語の研究にも力を入れたところだ。北海道教育大学のアイヌ語研究グループとの関わりを通じて、現代日本におけるアイヌ語の位置づけを考察し、学問的な交流を深めた。

また、北海道が日本領となった明治二年以降のアイヌ＝先住民の状況をより立体的に理解すべく、台湾の先住民についての調査準備を開始した。台湾は日本の植民地統治を受けた「外地」であり、そこには当時「生藩」と呼ばれていた先住民（原住民）がいたわけで、それは大日本帝国全体の北と南の端に位置していた＝位置させられていた地域だといっていい。そこにいた先住民たちも、差別的な扱いを示す呼称である「土人」ということばを使いつつも、アイヌと台湾原住民は比較対照可能な存在として受け取られていたことは明らかだ。だとすれば、日本帝国はもちろん、台湾政府の先住民政策や、現在の台湾原住民のアイデンティティ問題は、アイヌ問題を考える際に非常に有効な比較対象になるのではないかと考えるのである。

現実に、台湾には台湾文学館という公的な機関があり、そこでは原住民作家についての講演や作品についての展示などを欠かしていないという。これは日本とは少し状況が違うだろう。資料閲覧のため筆者（李）は何度も北海道立文学館を訪れたが、先住民たるアイヌについての展示は、明治期のバチェラー八重子や知里幸恵、知里真志保から違星北斗までを「アイヌ文学」として展示するのみで、戦後のアイヌ作家についてはほとんど取り上げられてないばかりか、筆者（李）が研究のために立ち寄ったこの数年の間でも、俳句の江口カナメ、作家の鳩沢佐美夫などが、それまであった場所になくなっていることが確認できている。

このような問題点を含め、台湾原住民との比較という新視点を得て、研究活動を活性化させた。

当該年度は、先住民とはなにかという概念をめぐる考察として、［雑誌論文］の①と、具体的な文学研究の論文として［図書］の②を発表する。

（３）平成２０年度

平成２０年度は、今を生きるアイヌ作家である戸塚美波子氏をはじめ、１９７０年代のアイヌ文化運動の担い手と、その当時出版されていたアイヌの「アイヌネノアンアイヌ」という、アイヌの新聞を閲覧、研究することで、戦後のアイヌ作家がどのような問題意識を持って作品を書いていたかということを検証した。

また、前年度から問題として取り上げてきた台湾原住民についての調査に直接訪れた。台湾原住民の博物館などでのディスプレイの仕方など、その政治的な問題まで含めて、アイデンティティとその文化表象を考察することにつとめた。また、台湾原住民の若い世代の話も収集した。これは、北海道にある「観光アイヌ村」とも比較しうるもので、先住民に対する認識の仕方そのものを問うために必要な調査だったといえる。また、二風谷でのアイヌ系の人びとのお話をうかがったのも、この比較研究のために重要だったといっていい。

戦前の日本が「意識的多民族国家」であったのに対して、戦後の日本は「無意識の多民族国家」あるいは「単一民族幻想」の国であるが故、戦後のアイヌは自らをアイヌだと自称しにくい状況が続いた。そしてそれは、アイヌの運動＝解放運動というものへとリンクしがちなものへと変わっていったといっていい。

これは、戦前期（明治）の近代化のための日本語習得と、その日本語による表現というものとは反対に、日本という「単一民族幻想」を持つ国に所属させられていることへの不満と、その傷痕を乗り越えるという運動へと転化していった。そこで、在日朝鮮人作家の

運動や、部落と呼ばれる同和地区出身者の議論と親和性を帯びるわけである。
　問題は、在日朝鮮人文学の中にある、差別との戦いやアイデンティティ問題、そして自分の正体を明かすことのできない時代の空気への抵抗という問題系が、アイヌ文学全体に広がっていったといっていい。鳩沢佐美夫の文学作品はその原点といっていいだろう。
　筆者（李）は鳩沢佐美夫の友人で、作家の盛義昭氏から多くの鳩沢に関する文献（生原稿や、その他の証書）を見せていただくことができ、アイヌ近代文学の中での戦後期を、鳩沢を中心に据えることでたてていくことを構想するに至った。それは、ほぼ同世代のアイヌ人作家である上西晴治と重なり合いながら、「単一民族幻想」を内側から食い破っていく思想であるといえよう。今後、アイヌ作家論をまとめ、明治以来のアイヌ作家たちの研究をまとめたいと考えている。
　当該年度は、さまざまな立場からアイヌについて考える論理的な考察を行った。その成果として［図書］①があげられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 李建志、日本の「先住民」、エスニック・マイノリティから見た－「他称」と「自称」の問題、東アジア日本語教育・日本文化研究、１０輯、pp３５３－３７２、２００７年、査読有
② 李建志、「母語」と「祖母語」のあいだにあるもの－李恢成、金城哲夫、鳩沢佐美夫、韓国日語日文学会 ２００６年度秋期学術大会発表論文要旨集、pp９－２３、２００６年、査読無
③ 李建志、アイヌの温泉利用、温泉研究、４号、pp１０－１２、２００６年、査読無

〔学会発表〕（計２件）
① 李建志、日本の「先住民」、エスニック・マイノリティから見た－「他称」と「自称」の問題、東アジア日本語教育・日本文化研究学会第１０回大会、２００６年１１月１１日、韓国済州大学校
② 李建志、「母語」と「祖母語」のあいだにあるもの－李恢成、金城哲夫、鳩沢佐美夫、韓国日語日文学会秋季大会、２００６年１０月２１日、韓国明知大学校

〔図書〕（計２件）
① 李建志、筑摩書房、日韓ナショナリズムの解体－「複数のアイデンティティ」を生きる思想、総ページ数２３４頁、本研究にかかわる部分　第１章日本の「内地」という政治第３節北海道の立たされた位置、在日の立たされた位置、pp７９－９０、２００８年
② 李建志、作品社、朝鮮近代文学とナショナリズム－「抵抗のナショナリズム」批判、総ページ数２５８頁、本研究にかかわる部分　第２章「母語」と「祖母語」の狭間にあるもの－李恢成、金城哲夫、鳩沢佐美夫、pp７５－１００、２００７年

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　李　建志（LEE KENJI）
　県立広島大学・人間文化学部・准教授
　研究者番号：70329978

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号